慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	サミュエル・ジョンソンの夢 : ジェフリー・チョーサーのイギリス18世紀
Sub Title	Samuel Johnson's literary ardour : Geoffrey Chaucer in the eighteenth century
Author	原田, 範行(Harada, Noriyuki)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2022
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.123, No.3 (2022. 12) ,p.46- 59
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	松田隆美教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01230003-0046

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

サミュエル・ジョンソンの夢
—ジェフリー・チョーサーのイギリス18世紀

原田　範行

1. 幻のチョーサー全集

1784年11月、サミュエル・ジョンソン (Samuel Johnson) は75歳。病状の悪化から死を覚悟していたと思われるこの時期、しかし彼は、今後の執筆計画を文書にまとめて若い友人ベネット・ラントン (Bennet Langton) に託している。[1]「神学」「哲学、歴史、文学全般」「詩ならびに想像力による作品」の三つに大別されたこの文書には49項目にわたって計画が記されているのだが、実はその「哲学、歴史、文学全般」の最初の方に、次のような一項がある。

> チョーサー。彼の新版を、写本類および旧版に依りつつ、さまざまな解釈や推定、彼の言語表現への注解、太古からチョーサーの時代に至るまで、そしてチョーサーの時代から現代に至るまでの間に言語が経験した変化とともに。習慣その他を説明した注釈や、ボッカチオをはじめ、彼が借用している作家たちへの言及、さらに物語を語る際の自由さについての説明を加えて。伝記と正確な語源的用語解説も。（Boswell, *Life* 4:381）[2]

これが全49項目の中で最も詳しく具体的であることを考えると、ジョンソンにもしあと数年の余命があれば、あるいはジョンソンによるジェフリー・チョーサー (Geoffrey Chaucer) 全集が編纂されていたかもしれない。だがジョンソンは、同年12月13日にこの世を去った。18世紀の文豪が死の直前に至るまで明確に意識していたこの幻のチョーサー全集とは、彼にとって、またイギリス18世紀の文化において、いかなる存在であったのか。ジョンソン研究においても、チョー

サー研究においても、あるいはまた広くイギリス18世紀文化研究においても、ともすれば看過されがちなジョンソンとチョーサーのこうした接点を軸に、ジョンソンの文学理解とチョーサー文学の受容、そしてイギリス18世紀文化の様態に再検討を加えようとするのが、本稿の目的である。[3]

2. ジョンソンの悔い

一般に、イギリスの中世文学や中世研究、あるいは中世主義の勃興を考える際、古典主義の時代とされるイギリス18世紀に重要な関心が払われることはまずない。イギリスの国学や国民文学といった発想の源流はたしかに18世紀に見られるものの、古典古代の文学・文化を一つの範とする古典主義は、基本的にナショナリズムとは対極に位置しており、また、国内の古事への探究も、いささか好古趣味の域にとどまっていることが多く、その精緻な分析は19世紀の実証主義を待たねばならないからだ。18世紀に端を発するとされるイギリス近代小説についても、例えば『ロビンソン・クルーソー』（1719）や『ガリヴァー旅行記』（1726）がそうであるように、特にその初期にあっては舞台がイギリスの外にあって、主人公がイギリスから飛び出して行ってしまう場合が少なくない。また、17世紀に起きた革命やロンドンの大火、あるいは18世紀に始まる初期の産業革命などによって、それまで辛うじて残存していた中世の身近な風景が次々に消失していったという事情も考えられよう。言語文化の面でも、イギリス18世紀の人々にとって中世は遠かった。「言語が古びてしまったり、情感がよく分からなくなってしまったりして、優れた作家が注釈を必要としなければならないのは嘆かわしいことだ」とジョンソンが述べた「作家」とは、ウィリアム・シェイクスピア (William Shakespeare) のことである（Johnson, “Preface”, *Johnson on Shakespeare* 7: 112）。チョーサーの英語はさらに2世紀あまり時代を遡らなければならない。古典語に通じていたジョンソンにしてみれば、「チョーサーよりホメロスの方が分かりやすい」（Johnson, “Preface”, *Johnson on Shakespeare* 7: 110）のであった。

だが、それでもなお、ジョンソンにとって、チョーサーが、そして一般に中世社会が接近不可能なまでに隔絶していたというわけではない。生地リッチフィールドの象徴的存在である大聖堂は、ピューリタン革命の際にかなりの損傷を受け

たものの、三つの尖塔を有する代表的な中世の建築物である。中世から続く伝統的な行事も少なからず残っていた。規範としての古典古代だけでなく、イギリス中世も彼の歴史認識の内に確実に宿っていたということを示しつつ、ヴァンスは、「中世およびルネサンスの生活の大半を洗練されていないものとしつつも、ジョンソンはなおチョーサーやシェイクスピアの才能と普遍性を賞賛していた」と述べている (Vance, *Samuel Johnson and the Sense of History* 93)。

実際ジョンソンには、中英語や中世文学を、そして何といってもチョーサーを、十分に検討し論述する現実的機会が、75年の人生の中で何度かあった。おそらくその最初は、1742年から46年にかけて彼が携わった、ハーレー文庫目録編纂事業であろう。この文庫は、第2代オクスフォード伯エドワード・ハーレー（Edward Harley）の蔵書のうち、41年に伯爵が亡くなった後、ロンドンの書店主トマス・オズボーン（Thomas Osborne）が購入したものである。無名の青年文士であったジョンソンは、この文庫の紹介記事を42年12月号の『ジェントルマンズ・マガジン』に執筆した後、オズボーンの下で先輩文士ウィリアム・オールディズ（William Oldys）とともに目録の作成や選集の編纂・解説をおこなっている。この文庫の小冊子類についての解説書には、例えば次のようなチョーサーへの言及がある。

> 527番。『耕作者の話』（*The Ploughman's Tale*）。（中略）四折本、1606年刊。31葉の解説付き。この解説小冊子には序文がなく編者の名前もないが、編者は多くの欄外注を施しており、原作者が使っている古語をよく説明している。この原作者の作品は、全集が刊行されれば、より広く読まれ、よく理解されるであろう。読者は、調べようとする単語をいちいち頁をめくって最後の用語解説に至らずとも、頁の脇に目を動かすだけでよいからだ。この編者が、何を頼りにチョーサーに爵位を与えているのか分からないが、この編者の時代にあっては他の人々も同様であった。この編者は、第2頁で、チョーサーのスペイト版全集に触れ、その苦心を賞賛し、また第5頁では、この『耕作者の話』、つまり、聖職者の高慢と強欲への不満話が、ジョン・ストウの書庫にある古い写本に基づいて、間違いなくチョーサーによるものであるとしている。最後に、これも指摘しておいてよいと思うが、この版本には、『耕作者の話』の序の前に「耕作者の描写」があり、これはたしか、アーリ

氏のチョーサー全集にはなかったのではないかと思う。（“Copious and Exact Catalogue of Pamphlets in the Harleian Library” 158-59）

この記述がジョンソンによるものかどうかは定かでない。オールディズの可能性もある。ただ、この目録編纂事業の特に後半部には、ジョンソンによる文章が多いことは既に指摘されている（Rogers, *The Samuel Johnson Encyclopedia* 102）。かりにオールディズによるものであったとしても、ジョンソンが目を通していた可能性は高いであろう。しかしそれにしても、上記の記述が、いささか拙速の感を否めないことは確かだ。実質的な内容はチョーサーの爵位をめぐる疑問だけで、残りは、例えば語注のレイアウトのことなど、形式的な指摘が大半を占めている。「アーリ氏のチョーサー全集」についての記述も曖昧である。そもそも、18世紀後半にはトマス・ティリット（Thomas Tyrwhitt）によってチョーサー作品からは除外されたこの『耕作者の話』についての検証は、何もない。雇われ仕事に辟易していたとはいえ、1745年には既にシェイクスピア全集編纂を企画してその『マクベス見本』を刊行していたジョンソンにしては、やはり粗略な仕事であったと言わざるをえない。

ジョンソンがチョーサーに深くかかわることができたかもしれない機会は、最晩年の傑作『詩人伝』（1779-81）執筆の際にもあった。当時、新進気鋭の出版者であったジョン・ベル（John Bell）がエディンバラで印刷して1777年から刊行し始めた109巻からなる『ブリテン詩人集』（*The Poet of Great Britain Complete from Chaucer to Churchill*）は小さくて廉価な十二折本であったが、誤植が多く、読みにくかった。ロンドンの出版者たちの従来の権益を損ねる恐れもある。そうしたことから、この『ブリテン詩人集』に対抗すべく、40名からなるロンドンの出版者が共同で『イギリス詩人集』(*The Works of the English Poets*) を刊行することとなり、目玉の一つとして、各詩人の作品集の冒頭に、ジョンソンによる簡潔な伝記と批評を付すこととして彼に執筆依頼したことが、この『詩人伝』執筆に至る経緯である。[4]当初この出版計画は、ベルの『ブリテン詩人集』と同様、チョーサーから現代詩人に至るまでとなっていたので、計画が予定通り進んでいれば、ジョンソンは確実に、チョーサーに関する評伝と本格的な作品批評を執筆していたことになる。だが、既に刊行が始まっていた『ブリテン詩人集』を追い越す必要があって、結局『イギリス詩人集』の方は17世紀のエイブラハム・カ

ウリー (Abraham Cowley) を始点とすることになった。ジョンソンはここでもまた、チョーサーに向き合う機会を逸したわけだ。

もっとも、ジョンソンがチョーサーに対していささか消極的であったのは、こうした外的要因によるものばかりではなかったようだ。というのも彼は、『詩人伝』に先立つこと10年ほど前の1767年2月、バッキンガム・ハウス（現在のバッキンガム宮殿）内の図書室で国王ジョージ3世に拝謁する機会があり、その折、「わが国の優れた文学的伝記というべきものを仕上げてほしい」との国王の要請を受け、即座にこれに同意しているからである（Boswell, *Life of Johnson* 2:40）。この時、ジョージ3世が念頭に置いていたのは、まさにベルの『ブリテン詩人集』に示されているような文学者たちの系譜、すなわちチョーサーを始点とするものだったであろうことはまず確実であるし、ジョンソンもまたそのように理解したはずである。だがジョンソンが、国王の要請にもかかわらず、その後、この「文学的伝記」にとりかかった形跡はまったく見られない。

自身の文学的経歴の序盤でも終盤でもチョーサーと本格的に向き合う機会を逸した、あるいはそのことにあまり積極的ではなかったジョンソン。死の直前に書き残したチョーサー全集執筆計画には、そうした彼のある種の悔いが表現されていたと見ることは自然であろう。だが、彼がチョーサーに取り組む機会を逸したのは、そればかりではなかった。彼の最大の業績の一つでもある『英語辞典』（1755）執筆に際して、である。

3. ジョンソンはなぜ『英語辞典』でチョーサーの扱いに失敗したのか？

上述のように、チョーサー文学およびイギリス中世の歴史と必ずしも絶縁していたわけではなかったジョンソンだが、『英語辞典』における彼のチョーサーの扱いにも、妥当性を欠く部分が少なくない。例えば、本文中、チョーサーからの引用は約60例を数えることができるが、エドマンド・スペンサー（Edmund Spenser）が1,000例を越え、ジョン・ミルトン（John Milton）に至っては2,000例を越えていることを考えれば、この『英語辞典』が、主に16世紀以降、特に17世紀から18世紀半ばまでの英語を対象とした、当時の現代英語辞典の様相を色濃く帯びていたことは明らかであろう。[5]

チョーサーやジョン・ガワー（John Gower）、ジョン・リドゲイト（John

Lydgate）といった中世の詩人たちへの言及は、むしろ『英語辞典』の巻頭に付された「英語の歴史」および「英語の文法」に多く見られるが、この中には、ジョンソンが誤解をおかしている箇所も少なくない。例えば、「英語の歴史」に次のような一節がある。

> わが国の作家の最初、つまり書き言葉の英語を記したと言ってよい最初の作家は、サー・ジョン・ガワーであり、彼はその『恋人の告解』において、チョーサーを彼の弟子と呼んでいるので、ガワーを英詩の父と見なしてよいのではないだろうか。（“The History of the English Language” 20）[6]

この引用に続いてガワーの詩の見本が短く紹介され、ジョンソンの説明はすぐにチョーサーへと移行するのだが、この『恋人の告解』においてチョーサーを「弟子」と呼んだのは、正確に言えば、ガワーではなくヴィーナスである。そのことへの指摘は、既に19世紀初頭に出版されたジョンソンの『英語辞典』への注釈でも言及されているので、ことさらこの間違いを18世紀的と考える必要はないのだが、それにしてもジョンソンの論述が、「まれにみるほどの不注意」であったと評されてもやむをえないであろう（Brewer, ed. *Chaucer: The Critical Heritage* 208-09）。「英語の歴史は今や広く英詩が始まったとされる時代、すなわち輝かしきジェフリー・チョーサーの時代に至る。彼こそ、詩的に文章を書いた最初の英詩人と呼んで差し支えあるまい」（“The History of the English Language” 20）とまで、「英語の歴史」においてチョーサーへの賛辞を惜しまなかったジョンソンが、しかし、肝心のチョーサーおよび中世文学について、なぜ「まれにみるほどの不注意」であったのか。考えられる理由はいくつかある。

ジョンソンの『英語辞典』は、例えばジェイムズ1世による聖書編纂（刊行は1611年）やフランスのアカデミー・フランセーズによる『仏語辞典』（初版は1694年）とは事業規模がまったく異なっていて、ジョンソンはほぼ独力でこの『英語辞典』を仕上げた。その中で彼は、入手可能な17世紀および18世紀前半の書物から徹底して引用を収集し、それを語義の歴史的変遷を念頭に分類している。したがって、『英語辞典』巻頭に付された「英語の歴史」も「英語の文法」も、かねてから指摘されている通り、従来の類書を取捨選択し抜粋するにとどまってしまっているのである。表面的なチョーサー礼賛も、おそらくはトマス・ウ

ォートン（Thomas Warton）からの聞き書きによるところが大きかった推測される。[7]また、ジョンソン自身が比較的容易にチョーサーの写本調査をできる環境になかった、という問題もあろう。例えば、チョーサーの『カンタベリー物語』の装飾写本として名高いエルズミア写本は、当時、ハートフォードシャーのアシュリッジに居を構えるエジャトン家の個人蔵となっていたが、これは、ロンドンのグラブ・ストリートで貧困にあえぐ無名文士が容易にアクセスできる状況にはなかった。同じく『カンタベリー物語』のヘングルット写本は、ウェールズのヴォーン家の個人蔵となっていて、これもまたジョンソンが容易に閲覧できる環境にはなかった。『英語辞典』編纂にあたってジョンソンは、1759年に一般公開された大英博物館・図書館さえ利用できなかったことを考えると、こうした現物の調査不足が、『英語辞典』に、そしてチョーサーをはじめとする中世文学の扱いに「まれにみるほどの不注意」をもたらしたことは否めない。

ただ、おそらく最も大きな失敗の理由は、ジョンソンが有していた基本的なチョーサー観、中世文学観によるものではなかったかと思われる。既に『詩人伝』に着手していた1778年4月のこと、彼はアラン・ラムゼー（Allan Ramsey）に次のように語っている。

> 文学は、わが国よりもずっと前にフランスにあった。パリは文芸復興の二番目の都市で、もちろんイタリアが最初だった。（中略）わが国の文学はフランス経由でやって来た。キャクストンが印刷したもので、フランス語からの翻訳でないのは、チョーサーとガワーの二冊だけだ。そのチョーサーだって、イタリア人から多くのものを受け継いでいることは皆知っている通りだ。いや君ね、もし文学が今フランスで春を迎えているとしても、それは冬の後の二度目の春だ。われわれは今、文学の面でフランスよりも先にいるけれども、実はずっと彼らの後塵を拝していたのだ。（Boswell, *Life of Johnson* 3: 254）

ウィリアム・キャクストン（William Caxton）が印刷したもので「フランス語からの翻訳でないのは、チョーサーとガワーだけ」というジョンソンの言葉は、チョーサーとガワーがイギリスの中世文学として優れているという意味ではなく、その後に続く「チョーサーだって、イタリアから多くのものを受け継いでいる」

に示されているように、チョーサーやガワーが、イギリスよりもはるか以前に文学が栄えていたイタリアやフランスから文学を見事に移植したことへの評価と言ってよいであろう。やや極端に言えば、文学の不毛なイギリスにいち早く文学を伝えたのがチョーサーであって、彼の卓見は、イタリアやフランスに注目してそれをイギリスに伝えたこと、すなわち彼の優秀さは、イギリス文学としての優秀さではなく大陸の文学に注目したことである、ということになろう。そしてこの観点から導出されるのは、そういうチョーサーたちの努力が実って、シェイクスピア、そして17世紀以降のイギリス文学が生み出されてきたのだから、今、自分がまず注目すべき対象は、17世紀以降のイギリス文学である、という考え方にほかならない。こうしたジョンソンの考え方にこそ、実は、『英語辞典』におけるチョーサーの扱いに「まれにみるほどの不注意」が生じた最も根本的な原因があったのではあるまいか。[8]

4. チョーサーと戯れる

しかしながらここで一つの疑問が生じてくる。上述のように、チョーサーをはじめとする中世文学の扱いをことごとく不十分なままにしてきたジョンソンが、それではなぜ、死を目前にして、わざわざチョーサー全集編纂の計画を、しかもかなり具体的な形で有していたのか、という点である。もちろん、悔いもあろう。だが、ジョンソンがラントンに託した計画書の全容を見てみると、そこにはむしろ既存の言語観や文学観、世界観にあえて一線を画するような、新たな好奇心の発露とおぼしき項目が少なくない。[9]ジョンソンのチョーサー全集編纂計画はこうした文脈において、すなわち人生の悔いというよりはむしろ、まさに1784年当時のジョンソンが新たに手掛けるとすればどのような企画であったのか、という観点から検討される必要がある。

実際、ジョンソンの周辺で、すなわちイギリス18世紀の文化において、チョーサーがそれほど等閑視されていたわけではない。実証的な本文校訂という点では多くの課題を有するものの、1721年にはジョン・アーリ（John Urry）による『チョーサー全集』が当時の有力書店の一つであるリントットから刊行され、そこには小規模ながら「陣羽織亭を出立する巡礼たち」をはじめとする30枚の挿絵が収録された。このアーリ版は、チョーサーの伝記や語釈が約1割を占めて

いて、専門書と言うよりはチョーサーへの入門書で一般読書人向けといった要素が強い。先に引用した『ハーレー雑録』の筆者が「アーリ氏によるチョーサー全集」として言及しているのは、この全集のことである。また1742年には、「数名の文人の手による現代版」と称される、いささか怪しげな『チョーサーのカンタベリー物語』が出版されている。「数名の文人」には、ジョージ・オーグル（George Ogle）、トマス・ベタートン（Thomas Betterton）、ジョン・ドライデン（John Dryden）、ヘンリー・ブルック（Henry Brook）、アレグザンダー・ポウプ（Alexander Pope）らが含まれていて、チョーサーを看板にしつつも、さながら当時の作家選集のような観を呈しているのだが、これはそれぞれの文人による『カンタベリー物語』の翻案・改作をまとめたものである。出版は、ジョナサン・スウィフト（Jonathan Swift）の全集で有名なダブリンのフォークナー社。『ガリヴァー旅行記』のような作品と『カンタベリー物語』が一つの出版社の中で、否、広くイギリス18世紀社会にあって共存していた、ということになる。後の本文校訂に道筋をつけた堅実なチョーサー全集が登場するのは1775年から78年にかけてのことで、編者はトマス・ティリット（Thomas Tyrwhitt）。オクスフォード大学マートン校のフェローにして、王立学士院会員であった彼については、ジョンソンも多少の接点を持っていた。15世紀の聖職者「トマス・ロウリー」（Thomas Rowley）なる人物の作品とされたいわゆる「ロウリー詩群」を調査したティリットは、これをいったんは真正なるものと評価して出版を支援するものの、結局はトマス・チャタートン（Thomas Chatterton）による贋作であることを見抜いてそのことを明らかにした。ジョンソンもまた、この真贋論争にかかわって、この「ロウリー詩群」を贋作と断定するのだが、その際、ジョウゼフ・ウォートン (Joseph Warton) やエドマンド・マローン (Edmond Malone) らの検証とともにこのティリットの新見解に依拠している。中世文学は、贋作とも隣り合わせであったということになる。

イギリス18世紀におけるチョーサー受容のこのような状況は、等閑視と一般に言われるようなものではなく、むしろ、中世後半から18世紀に至る雑多な文学作品が混淆していて、そこでは、チョーサーといわば戯れ合うような姿が見られると言ってもよいのではあるまいか。ドライデンやポウプをはじめとするジョンソンの先輩詩人たちもまた、比較的自由にチョーサーを読み、その翻案や改作をおこなっていた。そうしたかかわり方は、シェイクスピアの改作劇が一世を風靡し

た17世紀後半の文化的状況とも重なり合う。ジョンソンもまた、そのような文化的状況の中に生き、それを否定することはなかった。しかしながら、こうした受容や変容は、それと同時に、その根源をできる限り正確に把握したい、それによってその受容や変容の是非を見きわめたいという欲求にもつながってくる。もちろんこの両者は、決して対立するものではない。原作の受容や変容、あるいは原作を換骨奪胎するかのような改作でさえも、それをいったん容認するからこそ、原作の真実を確かめようとする好奇心が生まれてくると考えられるからである。ジョンソンは早い時期から、古典作品に対するこうした二重性を有していた。それが、古典主義に依拠しつつも、例えば三一の法則を否定するといったジョンソンのシェイクスピア批評とその全集編纂事業にもつながったと言えるだろう。

チョーサーをはじめとする中世文学の場合、これにもう一つ、重要な要素が加わっていた。自国の言語や歴史文化への視野を、イギリス18世紀にとってのシェイクスピア以上に大きく拡張する必要があった、ということである。最晩年のジョンソンの執筆計画の中に、チョーサー全集編纂計画と並んで、学問や文芸の歴史に関する抜本的な見直しを含むような項目が見られるのは、彼がこのことを強く意識していたからではあるまいか。こうした意味において、ジョンソンにとってのチョーサー全集編纂は、それが最晩年の企てであったからこそ、逆に新生を意味するものであったと思われる。おそらくはトマス・ウォートンの主張を漠然と連想しつつ、『英語辞典』の冒頭に付した「英語の歴史」においてチョーサーを「詩的に文章を書いた最初の英詩人」と記したジョンソンは、ここに至ってはじめて、そして本格的に、チョーサー文学を意識することになったのである。

5. チョーサーの正典化とジョンソンの夢

アーリの『チョーサー全集』以降、後のティリットの全集を想起させるようなチョーサー全集編纂企画は、実はイギリス18世紀において、少なからず存在した。ジョン・エンティック（John Entick）による1736年の企画書なども、その例の一つであろう。[10]こうした文化的状況の中にあって、ジョンソンが、いち早く、そして本格的にチョーサー全集に取り組まなかった根本的な理由は、結局、ヨーロッパの文学的伝統の起源をイタリアやフランスに見るという、彼の生涯の大半を支配したその歴史認識に帰することができよう。ところが、18世紀後

半に至ると、その状況に変化が生じてくる。「英語の歴史」の段階では、いささかおざなりな形でチョーサーのことを「最初の英詩人」と呼び、チョーサー文学のイギリス18世紀における変容や改作を一般読者の趣向に委ねていたジョンソンは、イギリスにおける文学の始点を、あるいはシェイクスピア以降の文学的展開の起源を、中世にまで遡って考究することの意義を、またその魅力を、ここに至って意識し始めることになったのである。ウィリアム・ブレイク（William Blake）やウィリアム・ワーズワース（William Wordsworth）、ウォルター・スコット (Walter Scott)、ロバート・サウジー (Robert Southey) をはじめとするロマン派詩人が、それぞれの文学的経歴のかなり早い段階からチョーサーを意識していたのとは様相が異なるのだが、しかしそれらは、いずれも18世紀後半から19世紀前半の時代状況という一点において、大きく重なり合う。そしてその傾向は、19世紀の、例えばフレデリック・ジェイムズ・ファーニヴァル（Frederick James Furnivall）らによるチョーサー作品の実証的な諸研究の根底にある歴史認識に至るまで、連綿と受け継がれていったと見てよいのではないか。キャノンは、こうした歴史的動向をイギリスにおけるナショナリズムの展開と捉え、その最初期におけるジョンソンの存在の重要性を指摘している（Cannon, “The Myth of Origin and the Making of Chaucer’s English” 646-47）。[11]面白いことに、ジョンソンがチョーサーと本格的に向き合う機会を逸した『詩人伝』は、例えば1810年に刊行されたアレグザンダー・チャーマーズによる『イギリス詩人作品集』などでは、ベルの『ブリテン詩人集』と合流してしまい、チョーサーはイギリス「最初の英詩人」という、あのジョンソンが記した言葉を結果的に裏書きするかのような体裁をとるに至っているのである。[12]

だがジョンソン自身が、チョーサー全集編纂の企てを、そうしたナショナリズムへの積極的な関与の一つと捉えていたと見るのは、いささか無理があろう。本稿で検討した通り、「わが国の優れた文学的伝記」執筆という国王の要請にさえほとんど耳を貸すことのなかった彼は、『詩人伝』執筆中においてさえ、イギリス文学の源流をイタリアやフランスにあると見ていたからである。ただ、そうした基本的な姿勢を維持しつつも、他方で彼は、イギリス18世紀におけるチョーサー文学のきわめて柔軟な受容と変容を目のあたりにし、その源流を確かめたいという率直な気持ちを次第に涵養していくことになる。それは、彼がシェイクスピア全集編纂に取り組んだ際の意識とも重なり合うのだが、シェイクスピア全集

の場合と大きく異なるのは、従来の古典主義的思考の枠を越えて、イギリス中世にその好奇心を広げていくという人生の新たな一歩を意味するということであった。そうした営みを、結果として、ナショナリズムと見ることは必ずしも不可能ではないが、その好奇心を駆動させたのはナショナリズムではなく、むしろ、チョーサーを自由に受容していたイギリス18世紀の奔放な文学的創造力であると考えた方が適切であろう。ジョンソン最晩年の執筆計画は、老文豪の夢の中に、「どの文化にも居場所を見いだし、視点も主張も多様化した現代において果たしうる役割を保ち続けている」（松田、『チョーサー　カンタベリー物語』228）というチョーサー文学の本質が次第に像を結びつつあったことを示しているように思われる。

註

1　原則として、本稿における作家名や作品名は日本語表記とし、必要な場合に限り、初出時に原語を付記した。

2　原則として、本稿における引用はすべて拙訳による日本語とし、原文の引用箇所を本文中に付記した。

3　例えば、パット・ロジャーズの『サミュエル・ジョンソン百科事典』でも、チョーサーへの言及は１箇所にとどまる（Rogers, *The Samuel Johnson Encyclopedia* 142）。ただ、本稿執筆時に刊行されたホプキンズとメイソンによる『18世紀におけるチョーサー―英詩の父』は、こうしたこれまでの欠を補う研究書である。この中では、例えば、ジョンソンの『ラセラス』における詩人イムラックの系譜が、ウィリアム・ゴドウィンの『チョーサー伝』やパーシー・ビッシュ・シェリーの『詩の擁護』とともに論じられている（Hopkins and Mason, *Chaucer in the Eighteenth Century* 408-09）。

4　『詩人伝』刊行に至る経緯については、出版者エドワード・ディリー（Edward Dilly）からジェイムズ・ボズウェル（James Boswell）に宛てた書簡に詳しい（Boswell, *Life of Johnson* 3: 110-11）。なお、一般に『詩人伝』という場合、『イギリス詩人集』に収められたジョンソンによる各詩人の評伝や解説を、別に4巻本として出版したものを指す。

5　チョーサーの用例には、例えば“Alcove”におけるトマス・ティッケル（Thomas Tickell）からの引用のように、引用文中にチョーサーが含まれている場合を含んでいる。

6　ジョンソンの『英語辞典』初版には頁数表記がないが、本稿では便宜上、第1巻冒頭にある「序文」、「英語の歴史」、「英語の文法」について、初版フォリオ版をもと

に頁数を付記した。

7　デマリアは、トマス・ウォートンの『スペンサーの「妖精女王」考』（1754）におけるチョーサーへの言及に注目し、これがジョンソンに影響を与えたことを指摘している。ウォートンの代表的著作である『英詩の歴史』（1774-81）の刊行は未来のことに属するが、ウォートンは1751年にオクスフォード大学トリニティ・コレッジのフェローとなっており、ジョンソンはボドリアン図書館等での資料調査において彼に助力を求めていた。Demaria, Jr. 80-81のほか、Sledd and Kolb180-81、永嶋42-43, 59なども参照。

8　『英語辞典』刊行の翌年にあたる1756年、『ユニヴァーサル・ヴィジター』誌には「チョーサー伝」が掲載されている。ジョンソンによるものかどうかは不明で、ボズウェルはこれを否定している（Boswell, *Life of Johnson* 1: 19）。ただ、「まれにみるほどの不注意」な扱いながら、ジョンソンが『英語辞典』においてチョーサーに言及していることとの関連は否定できない。Ferrero, *Reconstructing the Canon* 60-62などを参照。

9　例えば、異教の神話の集成やヨーロッパにおける学芸復興の歴史の再考、英語の詩語についての辞典、『タトラー』や『スペクテイター』における記事の一覧表作成とその分類、ナンセンスを集めた創作など、ジョンソンの関心は、従来の古典主義的な枠組みを大きく逸脱するものとなっている（Boswell, *Life of Johnson* 4: 381-82）。

10　ジョン・エンティックは『新綴字辞典』（1765）などを刊行した文筆家、教育者。ロンドンの出版者を代表してジョンソンに『詩人伝』執筆を委嘱したエドワード・ディリーとも親交があった。彼の企画によるチョーサー全集は刊行されなかった。大英図書館所蔵の “Proposals” を参照。

11　キャノンは、17世紀および18世紀に醸成された親チョーサー的歴史観が、19世紀におけるチョーサー研究や『オクスフォード英語辞典』におけるチョーサーからの用例収集の傾向に継承されていることを指摘している（Cannon, “The Myth of Origin and the Making of Chaucer’s English” 660-75）。

12　チャーマーズが刊行した『イギリス詩人作品集』のタイトルには、「チョーサーからクーパーまで（中略）サミュエル・ジョンソン博士による伝記的・批評的序文を含む」となっている。こうしたアンソロジー編纂に見られるジョンソンの受容、すなわち19世紀半ばに至るまでのチョーサーの正典化に与えたジョンソンの死後の影響については、稿を改めて検討する予定である。

参考文献

“A Copious and Exact Catalogue of Pamphlets in the Harleain Library”. London, 1746.

Brewer, Derek, ed. Vol. 1 (1385-1837) of *Chaucer: The Critical Heritage*. London: Routledge, 1995.

Boswell, James. *The Life of Samuel Johnson, LL.D*. Ed. George Birkbeck Hill. Rev. L. F. Powell. 6 vols. Oxford: Clarendon, 1934-50.

Cannon, Christopher. "The Myth of Origin and the Making of Chaucer's English". *Speculum* 71.3 (1996): 646-75.

Chalmers, Alexander, ed. *The Works of the English Poets, from Chaucer to Cowper; including the series edited, with prefaces, biographical and critical, by Dr. Samuel Johnson* . . . . London, 1810.

Chaucer, Geoffrey. *The Riverside Chaucer*. 3rd ed. Gen. ed. Larry D. Benson. 1988; Oxford: Oxford UP, 2008.

DeMaria, Jr., Robert. "Johnson's Extempore History and Grammar of the English Language". *Anniversary Essays on Johnson's Dictionary*. Eds. Jack Lynch and Anne McDermott. Cambridge: Cambridge UP, 2005.

Gower, John. *Confessio Amantis*. Ed. Russell A. Peck. Toronto: U of Toronto P, 1966.

Ferrero, Bonnie. *Reconstructing the Canon: Samuel Johnson and the "Universal Visiter"*. Frankfurt am Main: Peter Lang, 1992.

Godwin, William. *Life of Geoffrey Chaucer*. London, 1803.

Hopkins, David, and Tom Mason. *Chaucer in the Eighteenth Century: The Father of English Poetry*. Oxford: Oxford UP, 2022.

Johnson, Samuel. *A Dictionary of the English Language*. 2 vols. London, 1755.

---. "A Grammar of the English Tongue". Vol. 1 of *A Dictionary of the English Language*. 39-51.

---. "The History of the English Language". Vol. 1 of *A Dictionary of the English Language*. 11-37.

---. *Johnson on Shakespeare*. Ed. Arthur Sherbo. The Yale Edition of the Works of Samuel Johnson 7 and 8. New Haven: Yale UP, 1968.

---. "Rasselas". *Rasselas and Other Tales*. Ed. Gwin J. Kolb. Yale Edition 16. New Haven: Yale UP, 1990.

松田隆美『チョーサー　カンタベリー物語　ジャンルをめぐる冒険』慶應義塾大学出版会、2019。

"Proposals for Printing by Subscription in Two Volumes Folio, the Works of That Most Learned, Facetious, and Ancient English Poet Sir Geoffrey Chaucer, Knt. Poet Laureat . . . by John Entick" London, 1736.

Rogers, Pat. *The Samuel Johnson Encyclopedia*. Westport, CT: Greenwood P, 1996.

Sledd, James H., and Gwin J. Kolb. *Dr. Johnson's Dictionary: Essays in the Biography of a Book*. Chicago: U of Chicago P, 1955.

Vance, John A. *Samuel Johnson and the Sense of History*. Athens, GA: University of Georgia P, 1984.